

平成17年度 大台ヶ原自然再生推進計画評価委員会
第2回ニホンジカ保護管理対策検討ワーキンググループ
議事概要

◆日時 平成18年1月27日(金) 13:00~15:00

◆場所 春日野荘 すずらんの間

◆出席者

<委員等>

小船 武司	日本野鳥の会奈良支部 支部長
田村 義彦	大台ヶ原・大峰の自然を守る会 会長
鳥居 春己	奈良教育大学教育学部附属自然環境教育センター 助教授
村上 興正	元京都大学 講師
横田 岳人	龍谷大学 講師
高橋 裕史	独立行政法人森林総合研究所関西支所 生物多様性研究グループ

<事務局>

環境省近畿地方環境事務所 野生生物課 課長	徳田 裕之
国立公園・保全整備課 課長補佐	小林 浩二
国立公園・保全整備課	石川 拓哉
	福原 裕
同 吉野自然保護官事務所 自然保護官	熊代 哲
(財) 自然環境研究センター	永津 雅人
	黒崎 敏文
	荒木 良太
	岸本 年郎
(株) 環境総合テクノス	木村 博司
	樋口 高志
	保延 香代

◆議 事

- (1) 平成17年度調査・事業のとりまとめについて
- (2) 次年度以降の調査・事業内容について

◆議事概要

- 資料に基づき、平成17年度調査・事業のとりまとめ等について事務局より説明。
- 委員等からの主な意見等

(生息状況モニタリング調査について)

- ・ A1地区のⅡにおいて、2004年(29.9)に比べて2005年(101.9)と大幅に増加している。
- ・ 生息状況に関しては、利用度が重要であると考え。糞粒法の計算にこだわらず、糞そのものの数を示すのはどうか。

- ・ 森林の植生タイプ別に柵の内外における植生調査を行っているので、その調査結果と糞粒法の結果を見比べれば、利用度との関係が示されるのではないか。
- ・ ルートセンサス等の他手法と糞粒法との相関を示すことができるのではないか。
- ・ 区画法における西と東の境界については、既往調査のものを便宜的に使用しており、糞粒法のそれと合っていない。今後、当該地区の植生を踏まえ、境界を見直す必要がある。
- ・ GPS テレメトリー調査については、電波を受信できていない2割の情報が気になる。単に電波状況によるものか、それとも電波が届かない箇所に移動しているのか。
- ・ 近年、シカは牛石ヶ原に集まってきているようだ。
- ・ 区画法の結果では、秋になるとオスが増加している。他の地域から移動してきているのかを把握するため、オスにもGPSを付ける必要がある。
- ・ 春先、現地において、今季の豪雪によるシカへの影響を把握するための踏査をすべき。積雪深の計測についても検討すべき。

(個体数調整について)

- ・ 簡易捕獲ワナについては、ワナのタイプより捕獲結果に差異が生じているが、この差異は単にタイプの違いによるものか。
- ・ 捕獲については、周辺地域を含めて大規模に実施すべき。また、銃による捕獲も検討すべき。
- ・ 目標達成率の低さ(25/60)が一番の問題である。大規模捕獲柵及び銃による捕獲を始めるべき。
- ・ 環境省としての方針を具体的に示すべき。例えば、推進計画における「人の安全に十分配慮した銃の使用」とはどういったものか。
- ・ アルパインキャプチャーについては、他の場所に移動させたとしても意味がないと考える。方針について、撤去を含めて検討すべき。
- ・ ニホンジカ保護管理部会においては、シカの個体数調整について主力を注ぐべき。

(シカによる植生への影響調査について)

- ・ 剥皮状況調査については、本年度までの調査結果を精査し、剥皮状況と枯死の関係等について整理すべき。
- ・ 下層植生調査における表 1-4 食痕種リストについて、シカの嗜好性を評価できるような整理をすべき。

(次年度の防鹿柵設置方針について)

- ・ パッチディフェンスの規模について根拠を示すべき。
- ・ パッチディフェンスにおいてギャップ全体を守るのか、それとも単木を守るのか、方針を明確にすべき。
- ・ パッチディフェンスの設置に際しては、周辺を含めた現況調査を実施するとともに、モニタリング調査項目を設定すべき。
- ・ 面的な防鹿柵は、スズタケの保護に効果がある。スズタケ群落の保護についても配慮すべき。

[文責：近畿地方環境事務所]